

(九) 意地のリハビリ

歩き出しの杖には誇りがある

目は見開いて真つ直ぐ上を向く

マスクを着け 蓄膿症用のハンケチを忍ばせる

気温が上がって来たのか汗ばむのが早い

コース決定の意志もヨレヨレだ

杖持つ拳の意思も迷っている

右手に回り込み西の空を睨む

かつては鼻歌交じりの気楽さだった

今日は喘ぎの訪れが早い

咳払いしても様にならない

吐く息の湯気が眼鏡を曇らせる

表通りが見えてくる

車が冷やかしの表情で通り過ぎる

それを左腕で抹殺する

息をつめながら、なるべく遠くを睨み据える

バス通りまでかなりある

咳払いして歩みに弾みをつける

まだまだ復習の段階だ

マスクの中は既にビシヤビシヤだ

咽喉に痰が絡む

少し速度を上げてみる

歩ける 歩ける

ヨーソローヨーソロー

船ではないがリズムが出てきた

そのころ迷いの十字路に来る

どっちの道にしようかな

大外回りか直通コースか

一瞬あきらめ風が吹いてくる

ここで一発鞭をくれる

行け、外へ外へ、外回りへ

意地悪な自分が鞭を打つ

立ち止まるのを止めてガソリンスタンド前に行く

信号を右回りすると、団地周辺道路に入る

団地裏の駐車場の通りを老婆が通ってゆく

同じ身の上らしい、婆さん、負けるな

余計なことをいうな、自分が自分をやじる

掛け声が欲しいのは自分だ

足がよれてくる 杖に力が入ってしまふ

もう右手直ぐに五号棟がある いや見える

足がかなり短くなっている

これでは道の中にめり込んでしまふぞ

可成りのお年の老人とすれ違ふ

いいペースだ、スイスイだぜ、俺より大分年だぜ

意地が働いて、腰が立つ

左手がもう五号棟の中央階段だ

よろめきながら階段を上がる

明日はもつといい顔して歩けるだろう

玄関の取っ手を掴んでぐつと開く

(二〇二〇年四月三〇日)